

第十章 政界への道

大平がいつ政界を志すようになったかは、はっきりしない。しかし、当時の中堅官僚にとつて、政界がどういうものであったか、ここで簡単に、その頃の政界の状況を見ておくことにしよう。

すでに見たように、吉田茂は、昭和二十四年一月の第二十四回衆議院議員総選挙で、自分の藩屏とするたぬ多数の官僚を政界に登場させたが、官僚の方でも政界に魅力を感じる条件はととのつていた。まず、何よりも、憲法改正、民主化によつて国会は「国権の最高機関」となり、その地位は、飛躍的に高められた。その上、追放によつて、軍人、華族はもとより、ほとんどの既成政治家が衆参両院の舞台から締め出されており、新たな日本の設計図を引く仕事が多くの人政治家たちに任されていた。とくに、昭和二十四年以降は、日本が戦後の虚脱状態を脱し、復興の努力が軌道に乗りはじめ、米国の対日占領政策も、冷戦の激化に伴う政策転換が行われて、日本の経済的復興を支援する空気が高まりつつあった。それは、行政経験と実務能力のある官僚テクノクラート出身者が、国会議員に当選さえすれば、縦横に腕をふるうことができることを意味していた。しかも、インフレが昂進し、高級官僚の収入が相対的に下落した状況の中にあつては、官僚生活を全うしたからといって、それだけで戦前のように優雅な退職生活も、あるいは運がよければさらにピラミッドの頂上への道も待っているとは思われなかつた。

大平は、すでに蔵相秘書官として政界や政治家について多くのことを知りうる立場を経験していた。また政治家に転身した官僚たちの活躍を目のあたりにしていた。その最も典型的な身近な実例が池田勇人であった。一年先輩の黒金泰美が池田の驥尾に付して政界出馬を志していることも、大平にとつての刺激となつていたのであろう。

とはいへ、大平は決して官僚生活に飽きがきていたわけではない。大平は「安本の公共事業課長というものに興味も誇りも未練もありましてね……」と語っている。とすれば、大平が池田蔵相秘書官を命ぜられたとき、「まんじりとも出来」ぬ夜を明かし、「ココロチニミダレテ」と電報を打ったとき、すでに今回の秘書官づとめのその先に自分を待っているものが何であるかを予感していたのではないだろうか。

だが、そのことについては、彼自身は何も語っていない。ただ、われわれは、彼が、九州で遊んだ最後の地が別府であること、「人目にたたないようにコッソリ帰京」したと述べていること、この二つの点に注目したい。別府から故郷の香川へは船で至近の距離である。それは、齡三十九にして人生の大きな岐路に立たされた男が、とりあえず立ち寄りたい場所ではなかつたらうか。さらに、またこの時の総選挙での香川二区の設定員は三人であるが、その当選者は民主党が二人、社会党が一人であり、民主自由党（すでに述べたように、その後自由党に改称）の当選者は見当たらなかった。次点は国民協同党で、民主自由党の候補者は共産党のそれよりも下位だったのである。

池田新蔵相の初仕事は、彼の就任前に来日していたジョセフ・M・ドッジ公使とともに、日本経済再建の礎を築くことであった。占領軍総司令部が昭和二十三年十二月に発表した「経済安定九原則」にもとづいて、通貨の安定と予算の均衡を実現しようというのである。

ドッジと池田がつくつた昭和二十四年度予算は価格差補給金の打切りに加えて、復興金融債の発行停止と

一般会計からの巨額の償還（九百十五億円）をも含むものであったため、財政の均衡のためには、大幅な歳入の増加が必要とされた。「国税、地方税、専売益金を含めて国民一人当たりの税負担は、前年度の六・一四〇円から九・九四二円へと、約五割の増加を来し、租税総額は、国民所得二兆九、四〇〇億円の二六・七％に達した。これが『超均衡予算』の実体であった」。

予算通過の数日後、ワシントン発UPは為替レート一ドル＝三百六十円の決定を伝えた。昭和二十四年四月二十五日から実施されたこの為替レートは、当時は、円が高く評価されすぎていると考えられていたが、輸入価格を下げ、インフレを抑えるのに有効であった。さらに、この固定レートは、一九六〇年代に入ると、円の過小評価となり、日本の輸出拡大に貢献し、昭和四十六年十二月まで二十年余にわたって変動することなく、日本経済の発展を支えた。ドッジの処方した『超均衡予算』という劇薬（ドッジ・ライン）は、インフレという熱病を克服して、患者の生命をみことに立ち直らせることができたのである。

大平は、このような予算通過後、一月余で、蔵相秘書官を命ぜられたのである。

「大臣室には、金融難と重税に対する苦情が相次いで殺到した。

……殺到する苦情に対する私の対応方法の第一は、陳情者の立場になって、その主張に共感を寄せつつ、池田さんのやり口の足らざるところを責める側に廻ることであった。しかし同時に、池田さんが決して冷酷な人ではないことを、説明することも忘れないように心がけた。ちなみに池田さんは、気は優しく、思いやりもある人であるが、その容ぼうやマナーから思わざる誤解を受けたり、反感を招く人であった。そういう消息を陳情者にていねいに訴えて、理解を求めたのであった。

第二の方法は、税務署に対する注意であった。ドッジ・ラインは事実、空前の重税を国民に強いるものであった。自然、税務署の事務には渋滞が起り、過誤も多かった。徴税令書を同一人に再交付するような不

始末も随所に起こった。私は苦情に接することに、所轄の税務署長に電話して早急に納税者にお詫びをさせたり、過誤の訂正を求めることとした。

第三の対応は、銀行に対するものであった。融資希望者に対する融資の可否、条件、金額の決定は、もとより銀行自身の分別と責任で行われるものである。極度の金融梗塞下での融資希望者の苦情に、理解もし同情もするが、そのために銀行に圧力を加えることは、すべきものでもなく、またできるものでもない。私のできることは、せいぜいどういふ金融機関を選び、どういふお願いをすればよいかという、いわば一種の金融相談にのるのが精いっぱいのことであった。

ただし、その頃の大平秘書官を知るもののお話を総合すれば、彼の仕事ぶりは、かなり悠揚迫らざるころがあつたらしい。当時の池田の側近の一人によれば、「大平さんはよく、俺は細かいことは知らないから、それは大臣に聞け、俺は大雑把なことをやるんだ」と言っていた。秘書官室にも朝一度顔を見せるだけで、あとは適当に外を歩いているようだった。大平さんの得意とするところは、池田さんと大蔵省、池田さんと政界、池田さんと財界などの間を調整することだった。池田さんは信頼すると命をあずけてしまふ方だったから、大平さんは池田さんの代理としてのびのびと楽しんでやっていた」といふ。

日程などの細かいことは後輩の秘書官たちがやってくれる。大平は、肝腎かなめのところさえ押さえていればよかつたが、何が肝腎なことなのかを知るのは、それほど容易ではなかつた。ましてや、まだ政界の新鮮参事で政界の事情に十分に通じてはいなかつた池田のために正しい判断をするには、場合によっては池田本人よりも、深いところで政界、財界、官界を動かしている力に接して、その動向を的確につかみとらなければならなかつたであろう。いずれにせよ、彼は否応なく政治的に考え、政治的に動かざるをえなくなつて行った。

こうした調整活動の舞台の一つが、築地にあつた『栄家』という旅館である。この旅館の女将『お栄さん』

(和田栄子)が広島出身であるところから池田がこれをひいきにし、多くの集まりがここでもたれた。大平にとって、栄家はその人脈づくりの重要な場となった。大平は生前「オトウチャン」という愛称で呼ばれていたが、この栄家の女将がその名付親であったというのが当時を知る人々の推測である。その風貌と悠揚迫らざる態度が、女主人をしてそのように命名させたのであろう。

大平自身は、初当選の翌年に書いた文章で、自分が政界に出た動機について、二つの要因をあげている。

その一つは、秘書官稼業をやっているうちに、(大蔵省)事務官の仕事が肌に合わないような気がしてきたということである。「秘書官という政務官の仕事から正常事務官の仕事にかえって行ったとしても、事務官は事務官として何とかその中によさを見出してやって行けるに違いない。そもそも考え直して見たが、私の場合は素直に事務に帰って行く気がしなかった。それというのも男として何か自分の活力を十分に生かすような破天荒の冒険がしてみたかった。現状に対する倦怠感を打破して、自分の生命を思う存分燃焼させてみたかった」。

もう一つの要因は、官僚の将来についての展望である。「元来行政官というものは上りが早いものである。どんなに永く勤めてみても五十歳で行政官をやるといふ事は、日本においては稀有の例である。どうせ中途半端で再び娑婆に投げ出されるに違いない」。(高級官僚は、四〇代から次第に淘汰され、同期の一人が事務次官となる五〇代半ばまでには、他の全員が辞職した。この慣例は現在も維持されている。なお、以前は、一般に国家公務員には定年がなかったが、最近六〇歳定年制が導入された)。しかも時勢はきびしく、天下りは許されそうもない。では、実業はどうか。どうにも自信が持てない。「省議に参列する大蔵省の次官や局長連中の顔をつくづく眺めてみても、今この人達が官職を離れて裸で銀座の街頭に抛り出されたとしたら、果してこの中の何人が自らの力でその生活の道を開拓して行けるだろうか、文筆業は到底歯が立つ仕事では

なく、といて、僅かの恩給を頼りに隠棲する程の世捨人になるにはまだ血の気があり過ぎる」というわけである。

この二つの素因から、大平は政界出馬を真剣に考えはじめた。

「然らば政界に出るといことはどうであらう。それも一つの道には違いない。それにしても第一、政治という仕事ほど激しくけわしい仕事はない。それはきびしい日常の闘争を意味する。細い綱の上を渡るような仕事である。薄氷を踏むような芸当である。ほめられるよりは悪口をいわれることが多い。家庭を犠牲にする覚悟がなければならぬ。悪口を叩かれ頭を万人に下げながら渡世することは決して算盤に合う仕事ではない。それに選挙という困難で金のかかる闘争を、しょっちゅうくぐらなければならぬことは、何としてもおっくうなことである。……自分の性格を分析してみても在来の政党政治家のようなコースを踏む自信が果してあるかどうかと反省してみるが、どうも確たる自信がもてそうもなかった。

とは言うものの、政治という職業は人間社会における最も本源的なものである。人間は政治的動物だと言われている。凡てのこのために政治があり、凡ての社会的営為を貫いて政治があるのである。従って又政治家という公職はなければならぬし、誰かがこれをお引受けしてやって行かなければならぬ。……そこでふりかえって一体在来の政治家と自分とを較べてみて、自分が果して彼等と同等或はそれ以上の仕事が行けるかどうかを考えてみると、手前味噌かもしれないが、その位のことにはやってやれないという訳のものではないというほのかな自負心が湧かないこともなかった」。

不安と自負の交錯する日々がつづいた。

「彼は考え廻らしている間に、月日は遠慮なく経過して行って、何とか決断をつけねばならない破目に追いこまれて行った」。

この時期、政界出馬に関する大平の複雑な心理の動きをうかがわせる、いくつかの証言がある。

池田満枝夫人はこう言う。「ある日、久々に顔を出された大平さんが、いきなり茶の間と廊下の境の鴨居にぶら下がって、真面目な表情で、僕もいよいよ不惑の年（四十歳）になりましたよ。不惑になったら感ってはいけないと思いますが、いよいよ感うことになるんじゃないですかなあ」とおっしゃいました」。

大平が不惑の年を迎えたのは、秘書官就任の翌年（昭和二十五年）三月十二日である。また、二十六年の夏、池田の秘書だった登坂重次郎（のち衆議院議員）は、次のようなことがあったことを記憶している。

「池田大蔵大臣時代、池田、大平、宮沢、私の四人が柳橋で飲んで、それから隅田川に舟を浮かべたことがあった。その時、大平さんは突然、『大臣、俺もひとつ政治家になってみようと思うがどうだろう』と言いだした。『それはいいじゃないか、君なら政治家にびつたりの性格だ。ところで、金はいくらぐらいつくれるかね』。大平さんがこのぐらい、と答えると、池田さんは、『じゃあ、あとは俺が面倒をみてやるう』と答えた」。

話を戻すと、昭和二十四年の秋（十一月一日）、アメリカの國務省当局筋が対日講和条約について検討中と言明したことをきっかけに、講和の方式を巡って議論が一挙に活発化した。単独（多数分離）講和か全面講和かというのである。絶対平和主義をとなえるいわゆる『進歩分子』は全交戦国との全面講和をとなえたが、吉田首相は、同年十一月十一日に参議院で、単独講和でも全面講和に導く一つの途であるならば喜んで応ずると答弁した。そして翌二十五年二月、彼はマッカーサー元帥と会談し、しかるべき関係者を渡米させ、講和問題についてアメリカ政府の意向を打診したいと申し出、内々の諒解をとりつけた。

ここでまた、吉田の秘蔵っ子の池田が起用される。池田は、吉田の密命を帯び、戦後の閣僚としてはじめて、表むきは『アメリカ合衆国の財政経済事情視察のため』という名目で、四月二十五日に渡米した。

池田の訪米の旅はきわめて質素なもので、随行は英語の達者な宮沢喜一秘書官一人だった。池田は、講和後にも米軍の駐留を認めるという吉田の意思をドッジを通じてアメリカ國務省に伝え、また経済問題につい

ても、厳しいドッジ・ラインをかなり緩和するという約束をとりつけることができた。

この訪米の結果、アメリカ政府は、対日早期講和実現についてマッカーサー元帥と意見調整のため、六月二十一日、ジョン・F・ダレスを日本に派遣した。

ところが、ダレス訪日のわずか四日後の、同月二十五日、突如、朝鮮に戦火が噴きあがった。思いもかけぬ動乱で、講和は翌年に持ち越されることとなるが、一方この戦争で日本国内には、米軍の資材やサーピスの需要が急増し、ドッジ・ラインの強行で氣息奄々としていた日本経済にカンフル注射が打たれる結果となった。滞貨は一掃され、あらゆる工場が一斉に稼働をはじめた。俗に「特需ブーム」と言われた景気の到来である。

また、この戦争は、日本に対して大きな政治的影響を与えた。マッカーサーは、「日本国憲法は侵略に対する自己防衛権利を否定せず」と述べ、これが、今日の自衛隊の濫觴となった警察予備隊の誕生につながった。警察予備隊令が公布されたのは朝鮮戦争勃発後一カ月半の八月十日である。

朝鮮の戦局は、中国義勇軍が戦線に投入されたため泥沼化し、マッカーサー元帥は中国軍の基地東北地方（旧満州）の爆撃許可を要請したが、アメリカ政府はこれを容れずに、二十六年四月同元帥を解任、後任にはリッジウェー中将が任じられた。

結局、北朝鮮、中国軍が国連の停戦交渉申入れを受諾し、七月十日には休戦会談が開始されたため、ようやく先が見えてきた。それとともに、対日講和交渉は急速に進展して、九月八日には講和条約が調印されることとなった。

リッジウェー中将は就任後、間もなく対日講和をめざして、占領中の諸法令や諸制度の改廃、追放令の解除等の再検討を許した。六月二十九日と七月二日に発表された第一次追放解除者は、六万九千名にのぼったが、その中には多数の戦前政治家が含まれていた。この追放解除組の中でも旧自由党系の三木武吉、石橋湛

山らは、講和条約の批准後、鳩山一郎を擁して吉田から政権を譲られることを期していたが、追放解除の日ほど前、鳩山は脳溢血で倒れた。しかし、それでも鳩山派は結束を固めて、政局の転換をはかろうとしていた。

この講和会議を間近にひかえる昭和二十六年夏、池田は突然、大平に、米国視察の旅に出るように命じた。

「昭和二十六年八月、私は池田大蔵大臣の配慮で三カ月程米国に出張することになった。池田さんとしては、自分の身辺に私がないことによる不便を忍んで、極力私に外遊を勧めてくれ、自らその手配をとってくれた。唯彼は私にどうして外遊させようとするのかつまりその目的については一向に明かさなかった。

「講和会議もありいい機会だから行っておいで」といわれただけである。何時立つのですか」と聞きただせば、「これから一週間もすれば立つてはどうか」と言われた。そこで私は急いで旅装を整えて、八月十三日羽田空港を立つて渡米したのである。十月下旬に帰国してみたら、当の池田さんは、「もうこれから大蔵省の方の仕事は心配しないでよいから、出来るだけ郷里に帰って、郷里の人々と顔馴染になるんだ。何時衆議院は解散になるか判らんよ」と念を押された。そこで私は、始めて池田さんが私を渡米させた真意をよみとることができた。当初池田さんは「君は政治家になつてはいけない。君のような型の人物は官界に乏しいのだから、自分としては君が大蔵省に残つてくれることを希望する。絶対に政界進出など考えてはいけない」とよく言いふくめられていた。私は彼のこの豹変に驚いた。

右の文章によれば、池田が大平に政界進出をすすめたのは、明らかに、大平帰国後の十月下旬である。大平が池田に政界出馬を表明したのがこの昭和二十六年の夏のことだったというさきの登坂の記憶とのこの食い違いを、どう理解すべきか。後年の『私の履歴書』には、簡単に「池田蔵相が、わざわざ秘書官の私をこ

のグループに参加させることにしたのは、私を次の選挙に出馬させたいが、そのためにも一度アメリカを見ておきたい、という配慮があったようである」と記されている。いずれにせよ、池田は、昭和二十四年に吉田が多くの官僚出身者を立候補・当選させたのに倣って、自分の直系の議員を持つと考えると考へはじめていたのであろう。

大平の渡米は、アメリカ陸軍省所管の「ナショナル・リーダーズ・プログラム」によるものであった。「それは占領地域の国会議員、学者、役人等を一定期間（私の場合は九十日間）アメリカに迎えて、特定のテーマについて、見学、調査、研修等を行うものであった」。

大平は、参議院議員の高瀬荘太郎、衆議院議員の前田正男らとともに八月十三日に羽田を出発、ウエーク島、ハワイを経て、八月十四日（現地時間）サンフランシスコに到着した。翌日同地を発つて汽車で米大陸を横断、十九日ワシントンに着き、九月二十六日まで約四十日間同地に滞在し、以降、バルチモア、ウオミントン、フィラデルフィアを経て、九月二十八日ニューヨーク着。その後、予定を繰り上げてサンフランシスコ経由で十月二十一日帰朝した。全行程七十日間である。

渡米の任務は、一応、研究開発事業の予算面を調べるといふことになっており、官民各界の指導者を訪れて科学技術の振興対策を調査する一方、各地の大学、工場、研究所、試験場等を見学した。むろん、大平としてはじめてのアメリカであり、戦後の日本人としても早い時期の訪米であったから、目や耳に入るものがすべてが新鮮であった。

その旅行記は、『四国新聞』に九月八日付から十月二十六日付まで数日ごとに、「アメリカに行く」と題されて十七回にわたり連載された。ここでは、その連載十三回目の末尾に、次のように記されていることに注目しておこう。

「……こうしてワシントンの滞在が意外にのびたが、東京から一カ月繰り上げて帰朝するようにとの要請もあるので、九月廿六日当地（ワシントン）を立て、……廿八日夜ニューヨークに出る予定を樹てた。ニューヨークで一週間滞在してから、私は日本人のあまり行ったことのない南部地方を歩いて十月中旬には西海岸に出たいと思っている。至るところでまた通信をお送りしたい」。

そして十七回目の最後の通信には、「ニューヨークについてから最早一週間の日が経ち、明晩はモンゴメリに向けて出発しなければならなくなった……」とある。モンゴメリは、アメリカ南部中央のアラバマ州の州都であるが、残念なことに通信はこれで絶えてしまったので、大平が南部のどの地域を巡歴したか、そしてどのような感想を抱いたかは知ることができない。十八回目の通信は新聞には掲載されなかったが、それには、アメリカ紀行のしめくりともいふべき全般的な印象が述べられている。ここにその一部を引用しよう。

「……今日のアメリカに栄えている文化は、今迄のわれわれの文化史的方法論ではおし計ることがむづかしい何か異質の文化であるようです。それは天国と地上をつなぎ、無限と有限の架橋を具体的に志す実証的文化であります。

……又それは見方を変えれば、勤労と節約の文化といえましょう。如何に豊饒な国土が眼前に展開されたとしても、僅か二百年の間にこれだけの蓄積をやったのけ、これだけの国力を養うということはどう見ても平凡なことではなからうと思えます。

……次にそれは動いてやまない、停滞を知らない動的文化であります。競争という動力によって殆んど自動機械のように豊饒の只中を、勤労と節約という一連の実践が自発自転しつつ無限の行路を走っているようにさえ思われます。

……かくて今日のアメリカは、史上にかつて類例をみない巨大な怪物のような相貌をもって、膨大なる生産力を限りなく發揮しつつあります。

……私は全通信を通じて、アメリカを賞讃しすぎたかもしれません。しかし感じ易い客心に映ったアメリカの姿はざっとそのようなものであったわけです。それは明るい多様な色彩にいろどられた大巻でありました。今私は静かにその大巻の頁を閉じようとしています。(十月十六日、サンフランシスコにて)。

この大平の渡米中の九月四日、八日に、サンフランシスコ講和会議が開催され、日本は、対日平和条約調印によって国際社会への復帰を許されるとともに、これに伴い調印した日米安全保障条約によって、将来の安全を確保する体制がはかられた。

「吉田茂首席全権以下、日本の全権団の写真と会議の様子が、連日のようにアメリカの日刊紙の紙面を飾っていた。私はそれらの記事を読みながら、日本の独立回復の日が近づきつつあることを思い、胸を躍らせたものである」。因みに大平が寄稿した『四国新聞』十七回の連載記事は、大平の名前を知らなかった香川二区の有権者への大きなPRとなったであろうこともつけ加えておきたい。

平和、安保両条約の批准を目的とする第十二回臨時国会は昭和二十六年十月十日に召集されたが、これをめぐる野党の態度は複雑であった。社会党は、左右両派が対立し、十月二十四日の社会党臨時大会では、右派社会党(書記長浅沼稻次郎、講和条約のみに賛成)と左派社会党(委員長鈴木茂三郎、両条約に反対)に分裂した。共産党は、もちろん両条約に反対であった。前年四月に民主党野党派と国民協同党らが合流して結成していた国民民主党の一部にも反対があった。しかし十月二十六日の衆議院本会議の表決では、講和条約を三百七十四対四十七、安保条約を二百八十九対七十一の圧倒的多数で可決した。

この講和条約成立を機に、政局は新しい方向をめざしてその流れを変えるかに見えた。大平が(おそらく池田から)予定よりも一カ月早い帰朝を求められたのは、そのためである。

平和条約締結を自らの使命と自認していた吉田は、それが達成されたからには首相の座を去るものと見ら

れた。だが、吉田は、講和条約発効（二十七年四月二十八日）に伴う体制整備をも自らの手で行うことを意図し、ひきつづき政権維持の決意を固めた。その具体的なあらわれが、十二月二十六日の「クリスマス改造」であり、法務総裁に木村篤太郎元司法相が、官房長官に保利茂が起用された。こうして、第三次吉田内閣第三次改造が行われて、昭和二十六年は暮れる。

明けて昭和二十七年二月には、国民民主党と、松村謙三ら旧民政党系の追放解除者と、農民協同党とが合体して、改進黨が誕生した（幹事長三木武夫、六月には追放解除の重光葵が総裁に選ばれた）。

政局は解散ぶくみではあったが、吉田首相は任期いっぱい（昭和二十八年一月二十二日）まで解散は行わぬとして、毛ほどもそのそぶりを見せない。講和と独立に伴う案件が山積していて、前年十二月十日に召集された第十三回国会は会期延長五回を重ね、合計実に二百三十五日間に及んだ。吉田がこの国会で成立を図った法律は、占領中の団体等規制令廃止に伴う治安立法の破壊活動防止法（略称「破防法」）と日米安保条約の成立に対応して警察予備隊を保安隊へ編成替えしようとする保安庁法との二つであった。当然ながら、これは革新勢力の反発を招き、国会はしばしば混乱すると同時に、国会外のデモ行動も激化した。共産党は敗戦後しばらくの間、占領軍を「解放軍」と規定し、民主革命から社会主義革命への平和的移行を夢みていたが、冷戦の激化の中で、コミンテルンからその平和主義を批判され、中国革命の成功、朝鮮戦争の勃発、講和「日米安保体制の出現等に刺激されて武装闘争に立ち上がった。

国民の大多数は、大勢としてはサンフランシスコ講和と日米安保の体制を支持していたが、他方、長期にわたる吉田政権の継続に対しては、ようやくこれを倦む空気が強まりつつあった。

大平は、蔵相秘書官に籍を置いたまま、次の総選挙を目指して事前運動に入った。各市町村の血縁、地縁に結ばれた人々、学校や職場を共通にする人々を中心に支持者が求められた。大蔵省に奉職していた関係が

ら、酒や塩の製造、販売に關係する人々や、葉たばこの生産者が、まず陣營に参加してくれた。

しかし、二十年ぶりの四国である。元來が『自立たぬ少年』であつたため、小、中学の同窓生の中にも、『大平なんちゅう男があつたかの』と言つものがある始末で、後援会の結成は容易ではなかつた。

大平は、その頃の心境を次のように語っている。

「いよいよ政界出馬を決心したものの、一向に解散になる気配はない。吉田首相は講和締結に伴う跡始末までこの際一気にやつてのける決意でいたようだ。といつて政治は水物、何時解散になるか判らない。近いようでもあり遠いようでもある。このように半殺しのままで置かれるというのはわれわれにとつて決して楽なものではない。早く解散があつて欲しいという私の心理は、入隊した兵隊がなるべく早く戦地に行つて実戦に参加してみたいという心理と一抔似通うものがあつた。池田さんは私になるべく田舎に帰るようといつて勧めてはくれたが、田舎に帰るといつてもそう無闇に帰れるものではない。東京でやり遂げなければならぬ仕事がある。それに田舎に帰つて一週間行脚したら、その間に依頼された諸々の仕事に一応の結末をつけるためには少くとも一カ月はかかる。又帰省に際してはどうしても多少の経費がかかる。こつこつと一カ年もやらねばならぬとしたら、それは大変なことであると思つた。」

そうこつこつしているうちに、『解散は任期いっぱい』とがんばつていた吉田茂の足許をゆるがす問題が起こつた。それは、この七月で任期の切れる増田甲子七自由党幹事長の後任に、吉田が一年生議員の福永健司を起用しようとしたことに端を発した。自由党議員総会は混乱に陥つて收拾がつかず、結局、吉田が讓歩して、党長老の林譲治が幹事長を引き受けることで一応の決着を見た。ワンマン吉田の権威が低落しはじめる最初の兆しであつた。

事實、その後も党内の対立は一層深刻化の度を深め、もはや解散による以外に事態收拾の道がないことが明らかとなつた。結局、昭和二十七年八月二十六日に召集された第十四回通常国会の三日目、すなわち二十

八日に、吉田は突如憲法七条による「抜打ち解散」を断行した。

こうして第二十五回衆議院議員総選挙は九月五日に公示され、十月一日投票に決まった。独立後最初の総選挙である。追放解除組が一齐に立候補し、その数は三百名をはるかに超えた。

大平の選挙運動の中心となつたのは、兄大平数光である。父利吉の死後、親がわりのような立場で一家をひきうけ、正芳の高商、大学時代の学資を援助し、弟のためには、全くわが身をいとわなかつた数光は、マツカーサーという渾名があるほど、気性が激しく、ハツキリと断定的に物を言う性格で、リーダーとしてはうつつけだった。夫人の志げ子も山や島や町やあらゆるところを駆けめぐつた。地元では、志げ子の洗練されたフアツションと都会的な容貌が大平のイメージに大きなプラスとなつた。元陸軍少将の従兄の大平秀雄は、机上作戦から実戦まで、つまり参謀から一兵卒の役まで背負い込み、時計を見ては志げ子を次から次へとせき立てた。ムマと富江の姉妹を中心とする炊きだし部隊の苦勞も、ひとかたならぬものがあつた。選挙期間中はほとんど一日に三時間か四時間しか眠らず、一切の賄い方を担当した。そして岳父の鈴木三樹之助は、駒込林町の自宅を担保に入れて、選挙資金を捻出した。

大平一族あげての努力は、次第に効果を上げて行つた。

和田村の小学校の同級生四十名は、昭和二十七年二月、豊浜町のよろずや旅館に集まつて大いに氣勢をあげ、自転車で町中を走りまわつて大平のために票を集めた。

三豊中学の同窓の力も大きかつた。最大の援助は、加藤藤太郎からのものである。当時加藤は、神崎製紙創業間もない頃で苦闘中であつたが、息子のように可愛がつていた大平のために、物心共に大きな援助をあたえた。一年後輩の上森剛（現大平正芳記念館館長）も最初から手伝つた人物である。のちに、茨木山治のあとをついで大平の選挙事務長を一貫してつとめたが、大平が「選挙のために選挙をやるのと、政治のた

めに選挙をやるのは違つんじや」と言った言葉が印象的だったと語っている。

高松高商の同級生の多くはすでに大阪に出て仕事をしていたが、大平の出馬を聞いて、応援体制を敷いた。選挙が終わって開票になったとき、大平陣営が力を入れていないと思っていたところから何百という思わぬ票が出てきたが、それはこれらの人々の知られざる奮戦の戦果だったという。

大平はこの選挙にあたった自分の態度について、次のように記している。

「選挙ということは私にとつては始めてのことであるから、布陣の一切は人任せにしてこれに介口することはなるべく避けた。又介口するだけの経験はもとより知識の持ち合わせもなかった。唯私は敵を誹謗するようなことは絶対しないように一同にお願いしておいた。そしてこれだけのエチケツトは最後までどうにか皆んなによつて守つていただけたかと思つている。又私は自分で確信がもてることだけを演説の中で言つたつもりである。人間であるからその言動に多少の誇張や虚飾のあることは、偽悪者でない限り或程度避けることができることではあるが、なるべくそのようなことのないように心懸けた」。

大平は、自分の属する自由党の公約については、あまり関心を持たなかつた。彼はもつぱら、「インフレーションを抑制して通貨の価値を維持することが、経済発展の基盤であり、道義確立の基礎であり、社会秩序維持の前提である」と演説した。「財政の緊縮整理を断行して、安くつく政府 (cheap government) をつくつてゆかなければならない」と説いた。山へ入つても、島へ渡つても、この所信を繰り返した。

「目先の御利益を誇張的に宣伝して、有権者の歎心を買うようなことはいやしいことであると思つた。国民の良識がいつの日か厳正な審判を、かかる言動に下すに違いあるまいと思つていた。民主主義というものは、国民の良識を基調にもつているのだから、もし無責任な煽動が勝利を民衆の中に永遠に打立てるようなことがあるとしたら、私はむしろ私の方から民主主義との絶縁をも敢て辞さない積りだ、という氣負つた氣持をもつて、自分自身に言い聞かせていた」。

首相になつて最初の総選挙の際、財政再建＝増税という不人気な政策をあえて国民に率直に訴えようとした大平の態度は、この最初の選挙の時にすでに見られたのである。

「敵に対する闘志というものは殆んど湧かなかつた。むしろ私は選挙戦というものはどうも人との戦いであるよりも、より多く自分との戦いではなかるうかと反省していた。自分に勝ちきることができたら、必ず選挙戦にも勝てるにちがいない。私が選挙に勝つためには、まず自分の内奥に潜む驕慢と怯懦に打ち勝たなければいけないのだ。或は自分にしよっちゅうまとわりついて離れない羞恥心と退嬰心を取除き、短慮と投げやりの心を清算しなければならぬのだ。私はこういう心中の敵と絶えず闘争していた」。

まさに選挙は、大平正芳の精神修養の場となつたのである。

しかし、こうした候補者を戴く選挙陣営の苦勞は、当然のことながら容易ではない。とりわけ、自分でも認めているように、大平は演説が「全く未熟」であつた。甥の加地一憲によると、「当時、伯父の演説は、ストロングの発動機みたいだと言われた。これは低速の発動機で、一つパンというど、次のパンまで時間がかかるのや」というふうだつた。誰しもが「あんな演説でいつたい当選するんじやろか」と不安があつた。その弱点を、前に記したような友人たちが手弁当で支えた。

「私は今でも演説が上手とはいえないが、そのころは全く未熟で、事実、砂をかむようなものであつた。そのため私の陣営では、選挙の成り行きを心配していた。ところが世の中は面白いもので、思わざるところに知己がいるものである。＼ともかく、あんたの笑顔がかわいいからお札（票のこと）を入れてあげる」という婦人達が出てきたり、道路ですれ違ふ馬車引きのおじさんからは、所も名前もいわないで「うちに五票あるから入れてやる。しつかりやんな」といつて励まされたこともあつた」。

選挙の結果は、参議院からまわつてきた自由党鳩山系の候補者がトップで四万七千三百五十六票、二位が大平で四万三千九十三票、三位が社会党の候補者で三万六千三百三十七票、次点が自由党候補となつた。こうして大平は初陣の選挙戦を勝利で飾ることができた。一年生代議士の大平は、十一月に農林常任委員に就任した。